

町史のひとこま

(第二十回)

宝満宮の殿様樁

県道古賀・二日市線に面する
宝満宮に「殿様樁」と称する樁
の木があると聞きました。

「忠之公は本社を修補され、記念
若杉山の山林一部を寄附、記念

に一本を植樹さる。社側の殿様
樁と称するものは是也

黒田忠之は福岡藩主第二代で、栗山大膳の黒田騒動で有名な人物です。

次に、宝満宮の氏子總代をつとめられた木戸元節氏を訪問し、同氏のまとめられた宝満宮由緒草稿を見せていただくことができました。

それによると、慶安三年（一六五〇）忠之が宝満山^{かまど}竈門神社の堂宇を再建した際、須恵宝満宮もあわせて修造され、山林一



样 檐

「えの槇」ということなのでしょう。もちろん、当時の考え方からすれば、村の人々にとつてもたいへん名誉なことだったので、しょうが、一面、それに数倍する苦労もあったのです。まいか。

殿様槇が枯れたり、倒れたり、焼けたりしてはたいへんです。大雨だ、大風だ、雷だ、といつては、殿様槇を守らねばならなかつた村人たちの苦労が思われます。

殿様槇は宝満宮拝殿に向かって左側に現に残っています。

ですが、他にも諸説あります。さらに、戦時の『福岡県神社誌』では玉依姫命・菅原神(菅原道真)・須賀神(スサノオノミコト)の三神となつており、木戸氏の草稿には玉依姫命・伊弉諾命・志賀大明神とされていました。(以上、どれが正しいと いうのではなく、歴史的な変遷^{せんえん}ということで触れてみました)。

なお、『福岡県地理全誌』で 宝満大菩薩という仏教界のある神社となっています。これも名称をきらつた排仏毀釈の動きがあつたからでしょうか。

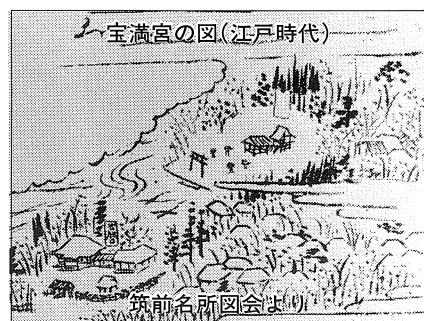
は神社名称も宝満宮ではなく竈門神社となつて います。これも宝満大菩薩とい う仏教臭のある名称をきらつた排仏毀釈の動きがあつたからで しょうか。

姫を祭神とすることによります。玉依姫は神武天皇の母君であたられる方で、宝満山（別名竈門山）に降臨されたとされ、中世になって宝満大菩薩の称号が定着したとされています。

須恵宝満宮も宝満山の竈門神社の末社にあたり、県内には

宝満宮・宝満神社の名をもつお宮は三二を数えます。(『宝満

山信仰史の研究』)。



宝満宮の図(江戸時代)

二年（一〇八五）竈門神社の神領八十庄（八〇）の莊園といふ意味か）の北境、今の吉宮の地に勧請されたと伝えられ、平安時代の莊園制との関係で興味深い点です。江戸時代に入ると、宝満宮は須恵村・上須恵村・佐谷村・新原村の産土神（土地を守る神）とされ、多くの氏子を抱えていたのでした（ただし、新原村については一部は宇美神社の氏子でした）。